平成１９年８月１６日提出

会派会長： 永　田　　寛 ㊞

政務調査研究視察　報告書

報告者：梅　村　順　一

視　察　日	**平成１９年７月２日（月）・３日（火）・４日（水）**
視　察　先	**沖縄県浦添市と宮古島市**
視 察 内 容	**「男女共同参画」、「学校公園化」と「バイオエタノール事業」**
視　察　者	**山崎泰信、高野克一、清水　勇、安形光征、杉浦立美、深瀬　稔、梅村順一　　計７名**

沖縄県浦添市

＜沖縄県浦添市のてだこ女男プラン＞

浦添市企画課比嘉さんと知念さん

１　浦添市の概要

人口：10.7 万人　世帯数：3.9 万世帯　面積：19 ㎢、歳出：335 億、財政力指数：0.69、沖縄本島南部、平均気温２２度。１１８７年から２１８年間、古琉球の王都として繁栄。近年は、那覇市のベットタウンとして発展している。

２　視察項目の概要

（1）基本計画と行動計画の概要

沖縄の方言で「てだこ」とは、太陽の子という意味。これは琉球第二の王統として君臨した英祖王の敬称。「てだこ女男プラン」は、男女共同参画の町「浦添市」を目指して行政・市民・事業者が協働で取り組むまちづくりの計画。第１次事業として、平成３年から１２年まで実施。第２次事業は、平成１８年から実施している。

浦添市役所前にて

（2）メンズキッチンデーの内容

男女共同参画社会を広め、日常生活の中でも意識付けを行うために実施された。沖縄電力による男の料理教室や、居酒屋での料理体験を企画協賛して「てだこ女男プラン」を説明。現在、女性団体協議会との共同作業で事業の推進を図っている。

（3）市民の声と反応

メンスキッチンデーを進めたことで料理に関する関心が高まり、得意料理ができる男性も現れた。また男の料理を通じて男女共同参画を考えるきっかけになる。シンポジュウムには、約１００名の参加があり、内容がよく理解できたという評価を得た。

（4）課題と今後の展開

今回のプランは、住民の男女共同参画社会実現に向けた一歩に過ぎず、引き続き市民へ理解と協力をする必要がある。評判の良い講師を呼んでも参加が伸びないのは、行政側の広報不足もある。自治会に出前講座のお願いをし、プランの周知を行いたい。

浦添市

〔感想・岡崎市への反映〕男女共同参画という課題を市民の身近なものとする企画として、「メンズキッチンデー」が実行された。市民と行政が協働して企画が推進されたことも注目される。まず庁舎内職員の意識改革が進み、推進委員から実行委員会へ移行。市長の名刺にも「私の得意料理は、〇〇です」と記入されている。毎月第１水曜日をメンズキッチンデーとし、ノー残業の実施や町内放送でも呼びかけをする。既存事業を活用して事業の講習会を開催するなど積極的だ。この意欲を市も見習いたい。

沖縄県宮古島市

＜学校の公園化について＞

思わぬ歓迎に驚きました

1　宮古島市の概要

人口：55,873 人、世帯数：22,021 世帯、
面　積：204 ㎢、歳出：361 億。平成１７年１０月１日、平安市・城辺町・下地町・上野村・伊良部町が合併して誕生した町。年間４０万人の観光客。全日本トライアスロンの開催や、プロ野球キャンプが実施されている。特産品は、マンゴーや黒糖、モズク、海ぶどう、宮古上布などがある。

2　施策項目の概要

(1) 学校公園化の内容

象徴的シンボルとして６８ｍの大壁画を作成。特色あるコーナーを設置してパネル看板を設置。南国特有の果樹園の造成。入学と卒業の記念樹を植栽。ツバキ１００本、マニラヤシ１５０本、テリハボク１００本、フクギ１００本、イヌマキ２００本を植栽。「キャーギ百樹の森」開拓。順路をつけた散策ガイド作成。

(2)公園化のきっかけ

学校教育を実感できる真の共育の実践。心の教育推進に核となる活動。遊び心とこだわりの哲学。

教育とは思い出を作り未来を語る営み

(3)期待される効果

生徒を主役とした「ひとり１エリア」美化活動の高揚。生徒と職員とＰＴＡの学校教育環境の意識変革。学校自慢の形成による実績と自信。特色ある学校として内外に誇れる財産。草花作りの広がりと自然環境への関心。

(4)地域やPTAの反応

日に日に変容する学校への拍手。校内ウォーキングが盛んになり美化への関心が高まる。環境は無言の教育者であることを証明した活動。学校活性化に貢献し地域でも話題となる。

(5)課題と今後の展望

長期展望を持ちながら地道な実践が必要。ＰＴＡや地元の協力無では実現できない活動であり一層の協力を要請。毎月１回の美化デーと共に「ひとり１エリア」の定着。高齢者を招いた学校美化と心の交流を推進。卒業生による美化活動の創意工夫。「夢は必ず実現できる」を信じて５年後の西城中学校に注目したい。

宮古島市

〔感想・岡崎市への反映〕

中学校の校門を入ると、せみの大群が出迎えてくれた。その向こうに岡崎市議団歓迎の垂れ幕があり、校長はじめ職員や学校評議員等総勢２０名ほどのお迎えに驚いた。玄関のテーブルで特製の団扇と、岡崎市行政視察のために製本された冊子が全員に配布された。宮古島気質には、アララガマ、ワイドー、ンミャーチがある。困難に負けない精神と、皆で頑張ろう、そして温かく人を迎える心があるという。まさに「親切で礼儀正しく友好的な人々」である。印象にあるのは、学校の経営指標である「さりげなくひたすらに」である。学校を公園化しようとする大胆な事業だが、先生と生徒そして地域を巻き込んで教育が進められている姿に感動した。教員からの恩着せがましい言動は、どことなく続かない。教育の再生を目指した校長のこだわりは、いつしか花を咲かせると思わざるを得ない迫力であった。

沖縄県宮古島市

＜バイオエタノール事業について＞

プロジェクト推進室長からの説明

1 はじめに

バイオエタノールをガソリンに混ぜてＣＯ２を削減し、地球温暖化を防止しようとする試みが、沖縄県の宮古島で始まった。この事業は、環境省の実証実験として１６年度企画され、１７年度にはプラントの基本計画と設計、１８年度にプラントの建設とエタノールの製造を始めた。

2 バイオエタノール事業の背景

宮古島はサトウキビの産地であり、島内には製糖工場がある。この工場から砂糖を絞った残液が出る。この残液は糖蜜と呼ばれ、糖度が４０％ほどある。一般的には飼料の一部として再利用されてきたが糖を多く含んだ糖蜜は、エタノールの原料にもなることから、プロジェクトの発端となった。これにより、島内の資源を再利用する資源循環型システムを確立しながら、二酸化炭素を削減するという目標が達成できることになった。

(2)プロジェクトの内容

今回のプロジェクトは、環境省から委託契約を受けた「株式会社りゅうせき」のバイオエタノールプロジェクト推進室が中心となって進行している。プラント建設メーカー、大学などの研究期間を含めると８つの機関が参加するビックプロジェクトとなった。

(3)プロジェクトの目標

このプロジェクトには①糖蜜を原料とするバイオエタノールの生産②エタノール３％混合ガソリン（Ｅ３）の製造③Ｅ３供給体制の確立④実車走行試験という４つの指針がある。開発から利用まで一貫したバイオエタノール実証事業を行うのは、わが国として初の事例となる。

(4)エタノールプラント

糖蜜からエタノール

エタノールプラントは、沖縄製糖㈱宮古島製糖工場内に建設された。日産１トンの能力を持つエタノールプラントが建設された。製糖工場内にあるため、原料の糖蜜は数百メートルしか離れていない製糖工場の糖蜜タンクから直接供給を受けられることも大きなメリットである。

(5)宮古島全域事業とするための課題

①原料糖蜜の安定供給②エタノール生産後に出る蒸留母液（廃液）の再利用化③生産における排水処理システムの確立④製糖会社との相互メリットの確立⑤Ｅ３のガソリン税の減免措置の適用⑥大規模施設建設、給油所適用施設の建設費確保⑦車以外にも活用可能なエタノール燃料の利用拡大等である。

宮古島市

〔感想・岡崎市への反映〕

株式会社りゅうせきは、環境に関する事業を模索する中で、環境省からバイオエタノール生産を引き受けた。地場産業であるサトウキビ栽培は、住民の暮らしを支えるものであり、エタノール事業ありきで参画したものでないと強調。美しい自然を持つ宮古島で、環境への配慮をしながら、産業の育成、農業の繁栄、地産地消、地域資源循環型社会の構築を掲げながら事業を推進している。

岡崎市においても、環境に配慮した事業の推進を見習うところがあると感じた。